

学 校 経 営 要 綱

I 学校経営の基本構想

1 公教育としての基盤に立つ学校

- (1) 日本国憲法、教育基本法、学校教育法をはじめ、教育課程の基準である学習指導要領に則った教育を行う。
- (2) 福岡県の学校教育振興プランや筑後市の教育施策、筑後市教育振興基本計画、学校管理規則等に則った教育を行う。

2 コミュニティ・スクールとしての地域とともにある学校

- (1) 子供一人一人が、松原校区の一員として安心して生活でき、楽しく登校できる地域と学校づくりに努める。
- (2) 家庭とのコミュニケーションを図り、保護者が安心して子供を送り出せる信頼される地域や学校づくりに努める。
- (3) 地域から愛され、期待に応える学校を目指し、地域の「ひと・もの・こと」につながる教育活動の推進に努める。
- (4) 筑後市や松原校区に愛着をもつ子供を育成するために、「協力・仲間」「伝統・愛着」「感謝」の心を重視した教育の展開に努める。

II 児童の実態から

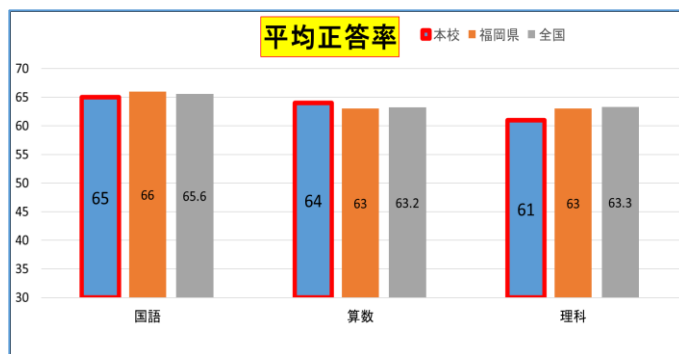
1 学力面から

(1) 日常の授業から

- 学ぶ態度は良好で、落ち着いて授業に参加できる子供が多い。
- 県の重点課題研究「主体的に問題解決する子供を育てる算数科学習指導」(R2～4)の成果として、自身の学びを振り返り(スタディ・ログ)、主体的・協働的に(スマイルタイム)学習できる子供が育ってきた。タブレット端末を活用した学習に慣れている。
- たくさんの子供が図書室を活用し、読書が好きだという子供が多い。
- 新型コロナウイルス拡大防止の対応が続く中、学ぶ意欲が減退したり、学習習慣が崩れたりすることで、学力が低下する子供が見られる。子供の学習意欲を高め、基礎学力が定着できるような教育課程編成や、丁寧な学習指導が必要である。

(2) 全国学力・学習状況調査(6年)

- 標準化得点を見ると、国語科100、算数科101であり、おおよそ全国平均である。
- 前年度の県学力調査から四分位層の推移を見ると、国語科、算数科共にA層の割合が増加、CD層が減少しており、良好である。
- 国語科では、「知識及び技能」に関する問題の正答率はどれも

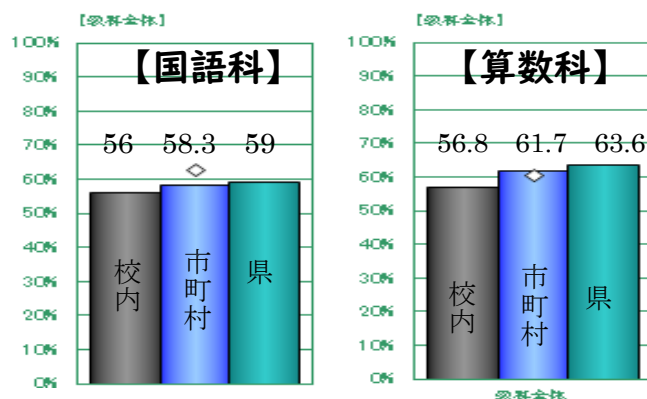


全国より高く、全国比+8%以上の項目があった。「思考力、判断力、表現力等」に関する問題については、全国と比べて下回っていた。問題形式では、記述式に課題が見られることから、「思考力、判断力、表現力等」の内容を重視した対策や授業改善が必要である。

- 算数科では、「数と計算」「変化と関係」に関する問題の正答率が全国比2%上回り、「図形」「データの活用」に関する問題の正答率が全国比2%下回っていた。「思考・判断・表現」の問題の正答率は+2.3%と向上しており、「知識・技能」の定着に課題が見られた。選択式や短答式の正答率はやや低く、記述式の問題の正答率が+6.3%と全国を上回っていた。
- 質問紙を見ると「分からなかった点を見直し、次の学習につなげる（全国比+7.4）」「ICT機器を毎日使用している（全国比+40.0）」が高く、主題研究で取り組んできた手だての効果であると考えられる。「携帯、スマホの等の使い方の約束がない（全国比+17.8）」「ゲームを1日3時間以上している（全国比+9.2）」と課題が見られ、家庭の協力を得ながら、規則正しい生活、家庭学習の環境作りに努める必要がある。

(3) 県学力調査（5年生）から

- 標準スコアで見ると、県平均比、国語科-3.0、算数科-6.8である。
- 国語科は、領域別で「読むこと（-5.0）」「書く（-7.0）」に、観点別で「思考・判断・表現（-4.3）」に課題が見られた。また、記述の問題（-9.1）が苦手である。
- 算数科は、領域別で「図形（-5.4）」「測定・変化と関係（-9.9）」



- 「データの活用（-13.6）」に、観点別で「知識・技能（-4.6）」「思考・判断・表現（-10.4）」に課題が見られた。短答（-6.1）、記述（-10.9）の問題が苦手である。
- 四部位層を県と比較すると、国語科でC層（+2.3）D層（+6.0）、算数科でD層（+9.0）の割合が高く課題である。

(4) 標準学力調査（1～6年生）から

- 多くの学年、教科で、全国平均を下回っている。また、学級ごとに各教科の基礎・活用・総合の結果をみると、学級間差が大きい学年がある。
- 同一集団による経年比較では、3年生（国語科、算数科）、4年生（国語科、社会科、算数科、理科）、5年生（国語科）、6年生（社会科）が昨年より向上した。
- 特に、算数科では、知識・技能だけでなく思考・判断・表現にも伸びがみられる学年があり、主事象や追事象、チャレンジ問題の問題設定や評価計画を基にしたカリキュラム・マネジメント等、教材研究の成果が現れていた。
- 正答率度数分布を前年度と比較すると、多くの学年、教科で2極化が改善されている。
- 対策としては、教師が、1単位時間及び単元を通して身に付ける資質能力を明らかにして授業づくりを行い、子供にも意識させて学ばせる必要がある。4年度までに研究を深めた、振り返りやスマイルログなどの実践を算数科以外の教科でも充実させる。また、実際に学力調査で出題された問題をコピーして、関係している単元ごとに教師用教科書に貼ることで、教師が授業の際に意識して指導できるようにしておく。

(5) R4後期アンケートから

- 「スタディ・ログ」を学習に活用することができたと答えた児童は、80.6%（R4前期比+4.5）。
- 「スマイルタイム」を学習で活用することができたと答えた児童は、82.2%（R4前期比-1.0）。
- 「くすのきタイム」で学習が身についたと答えた児童は、76.1%（R4前期比+3.6）

2 生活面から

(1) 日常生活から

- 素直で明るい、男女の仲が良く、だれにでも優しい言葉をかける子供が多く見られる。
- 縦割り班を生かした学校行事（運動会、松原フェスティバル、6年生を送る会等）や日常的な活動（掃除等）の中で、良好な人間関係を築くことができるようになってきている。特に、高学年になると、委員会活動や学校行事等の集団活動で責任ある役割を任せられ、規範意識や自覚が高まり、リーダー性を発揮できるようになる子供が多い。
- 「松原小のあいさつ」について、児童会等の活動を通して啓発活動や振り返る場を設定することで、「挨拶」がよくなる子供が増えている。
- 「縦割り清掃」を通して学んだ清掃の心構えや仕方が、継続されず、学級主体になると徹底されていない様子が見られるため、学年・学級で自己指導能力を高める必要がある。
- 新型コロナウイルス感染症拡大予防の対応の中、不登校傾向、行き渋り等の増加と、「テレビゲーム」「携帯、スマホ」の使用時間について課題が見られることから、家庭への理解と協力を求める必要がある。

(2) 児童アンケートから

- 「自分から進んで挨拶ができる」と答えた子供が86.0%と高く、地域の方に進んで挨拶したり、横断歩道を渡る際に運転手に向かって礼をしたりする子供も見られる。
- 「三心清掃（もくもく清掃）」ができていると答えた子供が91.6%と高く、縦割り清掃を積み重ねるごとに、集中して掃除に取り組む子供が増えている。
- 「手洗い活動」について、できていると答えた子供が87.5%と高く、職員の声掛けや委員会活動等の取組がコロナ感染防止の周知を高め、効果を上げている。
- 「廊下の右側を静かに歩く」は、できていると答えた子供が76.9%と課題である。児童会活動を含め、子供達が安全性を意識できるように全校で取り組む必要がある。

(3) 家庭・地域の環境について

- 保護者は、学校行事や授業参観等に進んで参加し、学校運営についても比較的理解を示し、協力的である。
- 朝食を食べていない、身だしなみが整っていない、早寝・早起きができない、登校時間が守れない子供が見られる。保護者への関わり方が難しく、家庭環境の厳しさがある子供については、関係機関（SSW、SC、家児相）等と連携し対応していく。

3 体力面から

(1) 日常生活から

- 始業前や業間休み、昼休み等に進んで運動場で遊ぶ子供は多い。学級経営の一環として、学級で遊ぶ時間を設けたり、体力づくりを目標にあげて運動に取り組んだりする学級も見られる。
- アンケートでは、「運動が好き」89%（目標92%）と「週3回以上」又は「週1～2日運動する」89%（目標90%）と上運動に意欲的な子供が多い。

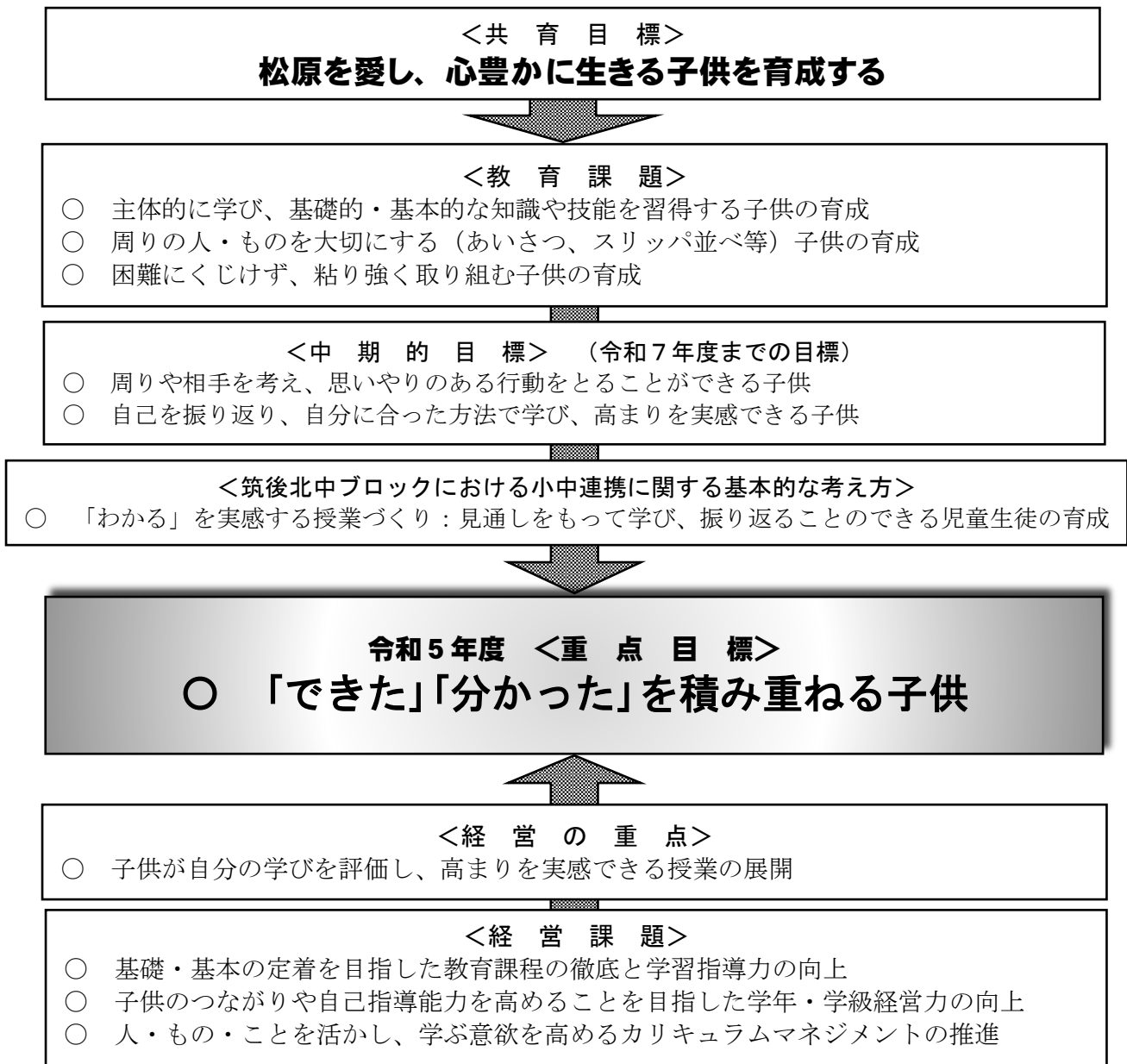
(2) 学校行事や体育科の学習から

- 意欲的に参加し、運動を楽しんでいる子供が多い。
- 体操服等の準備ができず、見学する子供が多い。学習準備を整えられるように、学級・学年便りや連絡帳の確認と声掛け、保護者への協力を促す。

(3) 全国体力・運動能力、運動習慣等調査（5年）から

- 体力・運動能力調査の体力合計点総合評価では、男子が0.2ポイント、女子0.8ポイント全国平均値を上回り、良好である。
- 総合評価を5段階でみた場合、A・Bの割合が、全国比男子+8.1%と高く、良好である。
- 男女共に「一週間の総運動時間」が全国比で男子+12.6時間、女子+40.4時間と高く、良好である。
- 男女共に「立ち幅跳び」が、全国比で男子-14cm、女子-10cmで課題がみられた。

Ⅲ 共育目標から本年度の重点目標へ



Ⅳ 重点目標達成のための共通的取り組み

「できた」「分かった」を積み重ねる子供

「できた」「分かった」とは、学校行事や各教科領域等の教育活動を通して、課題を解決したり、問題を解いたりする自分自身の学びの姿を振り返ることで、成就感や達成感を味わったり、自己の高まりを感じたりすることである。

『「できた」「分かった」を積み重ねる』とは、教育活動の中で見いだした課題を子供達が主体的、協働的に解決していく活動を通して、学ぶ楽しさや学習内容を理解する喜びを感じ、次の教育活動に挑戦し続けることである。『「できた」「分かった」を積み重ねる』子供を育むためには、「生徒指導の三つの留意点」が大切であり、すべての教育活動を通して実践する必要がある。

- ① 子供に自己決定の場を与えること
- ② 子供に自己存在感を与えること
- ③ 共感的人間関係を育成すること

1 子供一人ひとりが課題をもち、自分自身と集団を高め続ける取組

- (1) 各学期の学校行事（運動会、松原フェスティバル、6年生を送る会）に関連した道徳・特別活動・総合的な学習の時間の関連的な指導を工夫し、1学期「協力・仲間」、2学期「伝統・愛着」、3学期「感謝」の価値の実現を目指す。
- (2) 学期ごとに知・徳・体について個人の目標を立て、自己評価を行い、目標達成に向けた自分自身の取組を振り返る活動を通して、目標を意識した生活を送ることができるようにする。その際、取組過程や結果の評価、賞賛の場を設ける等、目標達成へ向けた意欲の向上や達成感を味わわせることを重視する。
- (3) 学校、家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行う。その際に、活動の記録としてココメモやキャリアパスポートを活用すると共に、「子供を認めて、ほめて、励ます」視点で学校・地域・家庭が価値付けを行う。
- (4) 企画と責任をもたせるために、子供の自主的活動を設定（児童会活動を中心）する。

2 「個別最適な学び」を生かした授業の日常化

本校は、令和4年度までの3年間、県重点課題研究指定校として「学びの個別最適化を実現する教育活動」に取り組んだ。「個別最適な学び」とは、「児童生徒が自己調整しながら学習を進めていくこと」であり、子供が問題解決する過程で自分にふさわしい学習方法を模索する場が重要である。子供自身が「分かった」「できるようになった」という学びの高まりを感じることができるように、「個別最適な学び」の観点から授業の日常化を図る。

- (1) すべての子供が自分のこととして学習課題をつかみ、意欲的に学び続けることができる。
- (2) 毎時間の学習で、「どのように学んだか（学び方）」「学んだことをどのように使ったか（内容）」「何が分かり、できるようになったか（理解度）」等をスタディ・ログ（学習履歴）として蓄積することで、自身の学びの高まりや成長を振り返ることができる。
- (3) ICT機器を活用した既習内容の確認とスタディ・ログをもとに、自分達で学習のめあて（単元、1単位時間）や達成目標（数値、具体的な姿）を作り、スマイルタイム（学習方法を自己選択・判断して問題解決する時間）を通して、協働して学びあうことができる。
- (4) 学級のみんなが「できる」「分かる」ようになることを意識した集団になることを目指している。

3 コミュニティ・スクールを生かした「社会に開かれた教育課程」の推進

- (1) 松原コミュニティ協議会、校区公民館、PTA諸活動等との連携により「松原を愛し、心豊かに生きる子供」を目指した教育活動と評価活動を実施する。
- (2) めざす子供像をから「何を学ぶか（教育内容）」「何ができるようになるか（資質・能力）」を明確にし、年間の学校・松原校区の行事を軸に、教科横断的な視点による各教科等の指導に取り組む。（カリキュラムマネジメントの実践）
- (3) 学習活動において地域のよいところや課題について「知る」活動や学んだことを地域に生かす活動を重視し、地域の「ひと・もの・こと」を積極的に活用する。
- (4) 実践した学習活動の結果について、学校（教師・子供）、地域、保護者からの評価をもとに、計画の改善・実施、教材の新たな開発について検討する。

V 経営の重点の具現化

1 子供自身が学びを評価し、意欲的に学び進める授業を目指した研修の推進

- (1) 「個別最適な学び」の観点を生かした授業の日常化
- (2) 校内研究組織や外部講師による授業改善に向けた研究授業
- (3) 子供の主体的な学びを高めることを目指したタブレット端末や電子黒板等を生かした授業の推進

2 学校運営協議会（コミュニティ・スクール）を生かした教育活動の工夫

- (1) 学校、家庭、地域が当事者意識を持ち、松原校区で育てる子供の姿や方策について、熟議を重ねることができる学校運営協議会の開催
- (2) 松原コミュニティ協議会、校区公民館、PTA諸活動等との協働による教育活動の運営と校区等「ひと・もの・こと」の活用
- (3) 地域人材を生かし、子供の基礎学力の向上をねらいとした「学び道場」の運営
- (4) 学校だより、ホームページ、学級だより、松原コミュニティ協議会だより等を通じた学校・家庭・地域との連携強化

3 組織の企画、運営力の向上を図り、同僚性を発揮させる組織運営体制

- (1) 教頭のリーダーシップ、主幹教諭の連絡調整による三部会各主任等との連携
 - ・重点目標達成に向け、D-CAPサイクルを踏まえた三部会（「学びづくり」「生活づくり部」「人間関係づくり部」）の運営と活動内容の充実
 - ・校務分掌等における人材育成（メンターによる指導・助言）
- (2) 業務の達成感や充実感に繋げる学校評価及び学級経営案（自己評価）の活用
- (3) 前後期ごとの子供の育ちの検証（共通アンケート）と改善の推進
- (4) 児童の特性又は家庭環境に応じた関係機関（市教育委員会、スマイル、児童相談所、家庭児童相談所、社会福祉協議会、SSW等）との連携と継続した対応

VI 教育課程編成の基本的方針と改善点

1 「主体的・対話的で深い学び」の実現を目指した授業改善

今日の学習で、何を、何のために行うのか見通しをもち、周りの人と共に考え、話し合い、考えを深化・修正してまとめ、振り返る過程が明確な授業の実現を目指す。

2 探究的な学習過程を重視した総合的な学習の時間

総合的な学習の時間では、問題解決的な活動（①課題の設定、②情報の収集、③整理・分析、④まとめ・表現）がスパイラルに繰り返され、発展的に学びを高めていく**探究的**な学習過程が展開されるように単元計画や一単位時間の授業を計画していく。

3 特別の教科 道徳

①言語活動を充実、②問題解決的な学習、体験的な学習等の工夫、③「これまでの自分」「これからの自分」について考えを深めることの3つの視点から授業改善に取り組む。

4 特別活動

縦割り班活動を通して、上学年が下学年を思いやり、下学年が上学年にあこがれをもち、仲良く、協力し、信頼し支え合おうとする人間関係を形成する。

VII 特別支援学級の教育課程編成の基本的方針

特別支援学校小学部学習指導要領を参考に、知的障がい学級と自閉症・情緒障がい学級それぞれにおいて児童の障がい特性に応じた教育課程を編成する

- (1) 障がいの状態により通常の学級における指導だけではその能力を十分に伸ばすことが困難な子供については、障がいの状態等に応じてきめ細やかな計画を作成し指導する。
- (2) 小学校に準じた教育を特別な教育的配慮のもと行う。特別支援学校及び小学校学習指導要領を参考にして、実態にあった指導内容の抽出、独自の教育課程を編成する。
- (3) 知的な遅れがみられる子供は、合わせた指導（日生、生単）の教育課程を編成する。
- (4) 子供の障がい特性に応じて自立活動を取り入れ、個の困り感（特性）を改善・克服できるようにする。
- (5) 子供の情緒を安定させ、生活のリズムを整えて活力ある生活が送れるように考慮する。
- (6) 集団の中で友達と適切に関わる力を培うことができるように、子供一人一人の実態に応じた交流の場を設定する。